

交わされるあいさつのように！

2018.8.26

混声合唱団マンダラーは、25年前に町内会のレクリエーションで集まった有志7人がそれぞれの妻を誘って14人で合唱を披露したのがきっかけ。「おしどり」の意味を持つ「マンダラー」を団の名前として活動することになったという。なんとも微笑ましく、生活の中にある音楽、歌なのだと思います。交わされるエピソードです。

今回のコンサートも、私たちの「生活の中にある歌、生活に近い歌」で構成されています。「日本民謡のメドレー」、そして、「九ちゃんが歌ったうた」。よく耳にしたり、口をついて出てくる歌です。これらに加えて、いわゆる合唱のために作曲された曲を選びました。一つは「混声合唱とピアノのための組曲『みやこわすれ』」、もう一つが「アカペラの響き」と題した無伴奏、つまり、ピアノの伴奏がない声だけの合唱曲です。

○アカペラ

アカペラとは「教会風」という意味。キリスト教カトリック教会においては、グレゴリオ聖歌など人の声だけで歌われるものが多い。それで、無伴奏で人の声だけで歌われる歌を「アカペラ」というようになった。アカペラ作品をやっているつくづく感じることは、合唱というものは和声（ハーモニー）の音楽だということ。言葉とハーモニーが織りなす音楽だ。

○みやこわすれ



千原英喜

作曲家千原英喜は、日本の伝統文化や東洋の民俗（族）性や宗教などをテーマとして、日本人としてのアイデンティティとは、普遍性とは何か、を問いながら創作活動を行っている。この組曲「みやこわすれ」は薔薇、すみれ、はっか草、みやこわすれの花々を編んだ歌のブーケと

いっていい。そして、特に「はっか草」と

「みやこわすれ」はどこか演歌のような曲で、一度聴くとその歌い回しや歌謡性の虜になる。

音楽とは何だろうかよく考えます。プロであろうが、アマチュアであろうが、懸命になって技術を磨く、そして、練習を重ねます。しかしながら、その技術を聴かせるために技術を磨くのでしょうか。名人芸を見せるような領域の音楽もあるのですが、技術の素晴らしさが人を感動させるのではなくて、音楽が内包する優しさ、喜びや悲しみ、愛が人々の心を魅了するのです。いくら高い技術を手に入れても、愛のない音楽は人の心を打つことはありません。では、どうして練習をして技術を得ようとするのでしょうか。それは、音楽が内包する優しさ、喜びや悲しみ、愛がどんなものであるのかをよりはっきり伝えるため、表現するために技術を磨くのだと思うのです。

宮沢賢治の「セロ弾きのゴーシュ」にこんなエピソードがあります。セロとはチェロのことなのですが、いつも楽団長に弾けないと怒られるゴーシュは夜な夜なチェロの練習をします。すると近くで暮らすネズミたちはおなかが痛くなると、ゴーシュの家の床下にやってきてチェロの音を聴きます。ネズミたちの腹痛が癒やされるからです。ゴーシュの弾くチェロには、例え下手であっても愛があるから腹痛が癒やされるのです。そして、そのゴーシュもまた、野ねずみや子狸、かっこうなど、小さく弱い動物たちからチェロの弾き方を学ぶのです。音楽は一方通行ではなくて、つくづく双方向なんだと思わされるエピソードです。聴く側が音楽によって癒やされる、勇気づけられる、力を得る。ところが、演奏している側が聴いてくれる人に励まされたり、次への活力を得たりすることもままある。聴いてくれる人がいることによって励まされるのです。

生活の中で交わされる挨拶のように、歌が、音楽が生活の中で響きあうといい。